

花鳥諷詠[®]



令和3年5月 ■ 第398号 ————— 目次

花鳥諷詠選集	木村 享史 …… 2
	湯川 雅 …… 4
虚子研究 『六百五十句』 研究 (16)	7
虚子研究 虚子宛書簡を読む (二十二)	
明治二十四年七月三十日 虚子宛碧梧桐書簡(封) ……	小田 直寿 ……11
子規と漱石と私 18 子規書簡集	14
読者の声から	14
この人の作品	新家 月子 ……15
一頁の鑑賞	和田 和子 ……16
	原田 佳織 ……17
風報	18
卯浪	23
新刊紹介	25
書評	岡安 紀元 ……26
地区行事開催日程表	27
編集後記	28

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

花鳥諷詠選集

木村享史 選

特選五句

誰彼のマスク縫ひたる針納

福山 広川 良子

会ひたくて会へぬ数だけ初電話

福岡 下原口 允子

降りしきる雪へ鐘打つ時計台

北海道 安田 豆作

住職の梅だより読むスマホかな

大牟田 本田 守親

里の名に惹かれて奥へ梅探る

枕崎 今給黎 雨音

二句短評

一句目——コロナ禍の一年であった。予防のマスクが不足で、家庭での手作りの物が重宝がられた。

作者はそれを作った人、何枚、何十枚作ったことか。いろんな人との思いが納める針にも籠っている。

二句目——この作者もコロナ禍に籠る人、新しい年を迎えても、まだどの友人とも会えてはいない。

会いたいと思う友へ、次々と電話を掛けてみる。声だけで交す年賀、それでも心だけは晴れて来ている。

入選六十句

蝌蚪生れて静かな騒ぎありにけり 松山 丹 経子

天蓋の梅ふふみそむ比翼句碑 富田林 尾崎 千鶴

玄関はその家の顔よチューリップ 鹿児島 青野 優子

ままごとの一人で五役梅の下 松原 加藤 あや

送り出て外の明るさ日脚伸ぶ 堺 内田 陽子

山里の水音にある春隣 伊賀 北村 みち

入院の夫の百日冬ざるる 長岡 笠原佐千子

飛び入りにくべ足しくる浜焚火 加古川 渡辺しま子

家居には家居のリズム福寿草 松江 小村 四温

賀状来ず風の噂の届きけり 糸島 藤原 泰子

歩けるといふ幸せや青き踏む 鳥原 柴田ちぐさ

大前は村のまほろば飾焚く 奈良 水上 末子

狢犬の胸はつてゐる初御空 北九州 元田 品子

吾が家てふ慣れし寒さに落ち着きぬ 姫路 上原 康子

早春の日を浴びて来し人集ふ 白山 大橋美代子

オンラインなるに繋がれ老の春 宇部 小林めぐみ
 人來り人去り梅の香の動く 名古屋 辻 美智子
 吾が恙氣づかひくるる賀状増え 町田 坂下 洋子
 早春の空まだ色の定まらず 福岡 津田 富子
 自負なくもそれなりに生き冬至粥 大牟田 介弘 浩司
 春浅し診察券のうすみどり 彦根 大久保 樹
 初糶の牛黒々と並びたる 芦屋 門脇 重子
 冬帽のやはらかなるを鷺掴み 宇佐 磯永喜八郎
 柚子のなる家に転居と便り來る 北海道 伊林美恵子
 農捨つる決断未だ二日灸 高松 大山 孝子
 曖昧に寒明くる日や風強し 高松 梶村 恭子
 朝市女残る寒さに声を張る 金沢 岸本佐紀子
 行き逢へば朝の挨拶梅真白 大分 村上 久子
 日脚伸ぶ自肅の靴を磨きをり 井原 平 春陽子
 盆梅の天地を包みたる日差 福山 杉原 芳子

再発の治療予定の初暦 刈谷 境 雅代
 潮の香と波音が好き椿好き 豊後高田 大波多美妃
 谷川の弾け二月の音となる 大阪 山田 天
 げんこつを合はす挨拶路の臺 鹿児島 串間 麻衣
 梅ヶ香や風の起伏に濃く淡く 愛知 鈴木 保文
 紅梅の今朝の蕾を数へたり ふじ野 清水 雪花
 春の霜忘れ物でもしたやうに 福岡 高宮加代子
 峽に住む限り野焼の賦役にも 高松 岩瀬 良子
 野火走る先へ先へと人走る 成田 阿部ひろし
 この辺り蔵多くして濃紅梅 立川 日置 正樹
 源平の浜辺に出でて寒稽古 西脇 岸本 悦子
 日めくりの一日一訓日脚伸ぶ 佐賀 松丸 昭子
 春を待つバス停前の洋菓子屋 松山 門田 安世
 子等の声無くもかまくら燭揺るる 横手 子野日さち子
 干海苔のつぶやく波の物語 太宰府 持永真理子

楯の空晴れたり初音聴けるかも 稲城興 正子

バツグから春色になる街角よ 前橋 戸所 理栄

路地奥に抜け道ありて濃紅梅 東京 坂口 祐子

峡住みの友より届く寒卵 吹田 河辺さち子

傘寿とて老の序ノ口梅の花 郡上 本田 節子

早春の光の中を行くフェリー 大分 平 英子

飛ぶ速さ呑み込む早さ野火の舌 羽生 樋口レイ子

足跡は花びら散らすごと兎 長崎 植村 華文

一吹雪暮れて郵便届きけり 青森 長島 喜美

父よりも母を氣遣ふ寒見舞 高松 永森ケイ子

母遠く娘もとほく雛飾る 由布 立川さよ子

立春の光は野辺に細波に 神戸 塩見 成子

水甕に昔ながらの餅の数 佐賀 西久保さくの

校庭の花時計より春めける 輪島 長徳谷とし

土の香を脱ぎ捨ててゆく路の臺 鳥取 椋 則子

●湯川 雅選

特選五句

永き日の隅に溜息しづめたる 岡山岩崎 正子

日溜りになる頃に来る冬の蝶 倉吉吉田 やす子

齡とは自覚なきもの春を待つ 大牟田西坂 美也子

雫して水の鼓動となる雪解 神戸前田 容宏

闇になほ闇流れ込み雪しまき 青森七戸 富美子

二句短評

一句目——溜息が出るほどの思事を抱いた一日。その溜息を暮しの隅に沈めてやり過ごそうとし、さらでだに永い日がより長く感じられる一日となった。昨今の疲への不安をも含む、やりきれなさなのかもしれない。平穩な日常に戻るまでの一日一日を耐える溜息とも思える。

二句目——良き日和にごく稀に見られる冬の蝶であるが、日溜りとなる時と場所を選んでは、ほろほると来て、恰も微かな命を温めるかに止まる。身じろぎもせず、人の気配にもすぐには飛び立たない。冬蝶をいとおしむ作者。

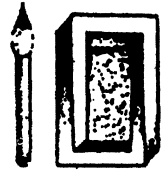
入選六十句

とんと底打ちて春立つ心かな 神戸 片岡 橙更
 冴ゆる夜の帳おり来し山家の灯 福知山 松山 牧子
 送り出て外の明るさ日脚伸ぶ 堺 内田 陽子
 初暦文字の早くも馴染みけり 米子 遠藤 裕子
 旅重ね来て流水の啼く夜かな 小樽 伊藤 玉枝
 船頭の抜きし棹より春の水 京都 本谷眞治郎
 山茶花や風のどこかがこぼれつぐ 香川 福家 市子
 隠れたる嫁が君より藁こぼる あわら 木幡 嘉子
 一湾の日差とろりと避寒宿 福山 佐藤 浩子
 寒月の刃に長居ゆるされず 鳥取 長安 節子
 暖かや寄りし茶房にきくシヨパン 福山 世良 正子
 弔辞書く手より心の悴めり 能代 三上乃婦子
 飛び入りにくべ足しくるる浜焚火 加吉川 渡辺しま子
 温泉の町の雪に静もる旅情かな 浜田 田中 静龍
 じつとして居られぬ自肅梅早し 太宰府 柴田慧美子

青空を広げこんな寒い海 姫路 大谷 千華
 滝凍てて水の威力の固まれり 八尾 窪田由紀子
 賑ふといふ暖かき中に来し 大川 中原南大喜
 乗初のフロントガラスすこし塵 羽生 塩田 章子
 通学路深雪這ひ行くランドセル 青森 小田切礼子
 雪こんこ雪こんことともういらぬ 平川 丹野 慶子
 待春や足下を見て遥か見て 白山 鈴木 恵子
 吾が家てふ慣れし寒さに落ち着きぬ 姫路 上原 康子
 この道と決めて迷ふも恵方道 高松 金沢 正恵
 早梅のこの一樹より梅の宮 高松 渡部 全子
 人恋へば闇のほどけて春隣 熊本 西 美愛子
 梅香る二の丸跡のただ広し 市原 鈴木 南子
 ほとほとと打てる裏戸や涅槃西風 兵庫 今地千鶴子
 晴れてゐて風は日替り浅き春 鳥原 三好 勝利
 見送りはいつも此処まで春時雨 高松 福家 敬子

年少の園児泣かせて鬼やらひ 松江 三浦 純子
 やや粹によそほひ二月礼者かな 吹田 小井川和子
 一枚の歌留多へ絡み合ふ視線 宝塚 二瓶美奈子
 今少し後少しだけ毛糸編む 弘前 須藤 育子
 外にも出て学ぶころに筐子鳴く 宇佐 尾崎 陽子
 朝市女残る寒さに声を張る 金沢 岸本佐紀子
 残雪の一かたまりに子ら遊ぶ 浜田 小池ミサエ
 日脚伸ぶ自肅の靴を磨きをり 井原 平 春陽子
 推敲の心にゆとりなき寒さ 福山 早間 幸枝
 盆梅の丈より長くしだるる枝 高知 伊野部哲也
 落椿向き向きといふ自由かな 高松 新谷 榮子
 峽に住む限り野焼の賦役にも 高松 岩瀬 良子
 野火走る先へ先へと人走る 成田 阿部ひろし
 遠足の一人が駄駄を捏ねてをり 北九州 吉富 莞峰
 主の鼻も目も摩りはてし板踏絵 長崎 松本 洋子

失くなりし余生の欲や冬ぬくし 新潟 佐藤 美春
 バッグから春色になる街角よ 前橋 戸所 理栄
 壁埋める家族写真や春埃 刈谷 稲垣三千代
 高僧は子猫に負けてしまはれし 福岡 塚田 由美
 社より寺へ抜け道恋の猫 加古川 瀧 積子
 薄水の鯉に従ふ動きかな 山形 加藤わか子
 飛ぶ速さ呑み込む早さ野火の舌 羽生 樋口レイ子
 足跡は花びら散らすごと兎 長崎 植村 華文
 一吹雪暮れて郵便届きけり 青森 長島 喜美
 ものの芽の萌ゆる庭にも陰日向 鳥原 中原 綾子
 忘れ物してゐるやうな年の暮 倉敷 木村英一郎
 ちらし配り捜されてゐるかれ猫 高知 岩佐 とよ
 日向ほこ心の棘の溶けてゆく 大分 峯戸松祥子
 突然の君の呼び出し懐手 広島 前田 節
 棘を見て薔薇の芽を見てとげをみて 岡山 石井 宏幸



編集後記

ものなくて軽き袂や更衣

虚子

明治三十三年四月二十五日の句です。冬物から軽い袂の着物に代え、気持ちの軽快さが伺えます。そんな明るさを令和の今こそ、味わいたいものです。

●先月の編集後記でもお知らせしましたが、六月総会は小規模開催の予定です。会員の皆様には、委任状の往復はがきを今月より送付致します。例年よ

り若干遅いお届けですが、六月号に掲載される総会資料をご覧頂いて後、必ずご返送頂けますようお願い致します。

●東海支部三重県部会担当の全国俳句大会は、先月投句受付を始めています。募集することはできませんが、皆様のご投句をお待ちしています。

●来年のこともカレンダーへの投句はがきを巻末に綴じ込んでおります。高校生以下のご家族、ご親戚、お知り合いの方がたに、ぜひご投句頂けますようお願い致します。絵も併せて募集しております。

●ご好評を頂いている俳句手帳ですが、在庫が残り少なくなつて参りましたが、増刷する予定ですが、今あるカラーの色は在庫限りとなる可能性があります。お好みの色がございましたら今のうちにご注文ください。また、新

色もお楽しみに！手帳と同サイズの季題集（復刻版）も制作中です。

●花鳥諷詠選選者予定

掲載	締切り	選者
8月号	5月20日	稲畑汀子 井上泰至
9月号	6月20日	木村享史 稲畑廣太郎
10月号	7月20日	稲畑汀子 黒川悦子
11月号	8月20日	木村享史 安原 葉

花鳥諷詠五月号(通巻第三九八号)

定価二五〇円(但し、本代は年会費を含む)

年会費一〇、〇〇〇円

令和三年五月一日

発行人 稲畑 汀子

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二丁目八十九

シャンブル笹塚二丁目一〇一

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇七一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一丁目九二